＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有

〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
https://tohoku-saiko.jp/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料

第154号

毎月発行

発行 2025 年（令和 7 年）3 月 16 日　日曜日

2025 年（令和 7 年）3 月 16 日　日曜日

【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、71 歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3 作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて 4 作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

3･11から14年目で再びの大災害の大船渡

大地震、大津波、必死の復興、それなのに今度は山火事、ようやく立ち直ったのに･･･慰めの言葉も見つからない･･･全国的支援を呼びかけるしかない

東日本大震災から十四年目を迎え、ようやく立ち直りはじめて、大震災の傷もずい分癒えて、さあいよいよ本格的な復興に踏み出せると皆が思っていた矢先の大規模な山火事だったであろう。

大船渡の人々の心を徹底的に打ち砕き、二度と立ち上がれなくするような大災害が再び襲ったのだ。

被災された方々はきっと、天を呪いたくなっただろう。何でこんなにひどい目に何度も遭わせるのかと。

しかも、前回の大震災からようやく立ち直ったと思った矢先に、再び痛めつけるなんて。

この先のことを考えたくもないが、あと何年も回復するのに時間がかかるのだろう。

東北の漁業のまちはご多分に漏れず、高齢化する地域であることはまちがいないので、大船渡の多くの高齢住民は、生きている間に、この災害からの復興は見られるのか、見ないまま死んで行くのかと思ったことだろう。

そして地獄のような未来が垣間見えたことであろう。

＊

大地震と大津波で破壊された家屋をようやくの思いで建て直したのに、今度は山火事で焼失して失った人も出ただろう。そうした方々の思いは想像さえできない。

＊

アワビの養殖業を営む漁業者は、山火事で海水供給装置が焼けてしまい、大量の稚貝を死なせてしまった。この先どう再建するか途方に暮れているだろう。

＊

山火事を消化するために大量の海水をくみ上げるので、港を消防組織に完全に開放しなければならなかった。そのために、何日も船を海に出せず、生業である漁業も出来ない日々も続いたようだ。

＊

あのときの大地震もすべてを破壊した。大津波もすべてを破壊した。

今度の山火事は再び、それまでにあった生活を破壊した。家も焼き、山も焼いた。漁業への大打撃はこれから被害の全体が判明してくるのだろう。

＊

山火事は、夜となく昼となく、十二日間も続いた。巨大なエネルギーが一瞬で大爆発する大地震や大津波と異なり、山火事は治まることなく十二日間も焼き尽くし続け、消化できない状況を地団太踏みながら遠巻きに見守るしかなかったのだ。さぞややりきれなかったことだろう。

まことに残酷な時間であったであろう。

＊

こうした状況がよく理解できて、「共有」できる東北は大船渡に何をすべきだろうか？

もうかける言葉はない。言葉だけなら空しい。

何かができるとすれば、被災地で足りないものを供給することしかない。

民家近くで燃え盛る山火事・・・日テレ NEWS より

対岸から山火事を見つめる・・・岩手日報より

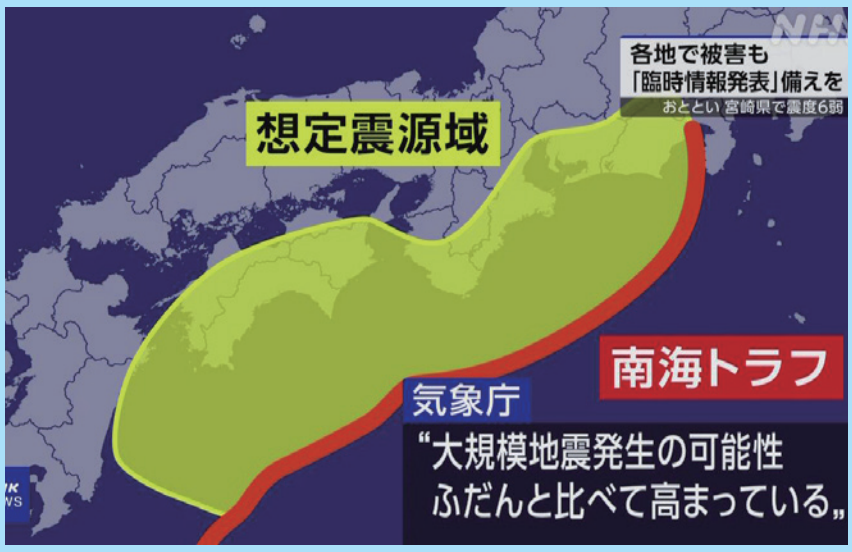
山火事で焼失した民家・・・日本経済新聞より

炭状になって燃え続ける山火事・・・d メニューニュースより

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

東日本大震災から学ぶどころか、震災前に戻っている？

能登でも教訓は活かされないし、人口減少にも歯止めかからず



いつまでも南海トラフですか？・・・NHK ニュースより

東日本大震災で学んだことを活かせていない

今年もこの季節になると、例年のように、東日本大震災関連番組がTVにあふれている。しかし、目新しい番組は特にないようで、見る気も起きない。

TVが熱心なのは相も変わらず、起きるかもしれない「南海トラフ地震」の想定される被害情報発信であり、繰り返しCG等を駆使して、声高にアピールし、国民を脅かし続けている。

今年の元旦に発表した内容によれば、今後三十年以内に南海トラフで想定されるマグニチュード八から九の巨大地震が発生する確率は、これまでの「70％から80％」とされていたのが「80％」に引き上げられたと大騒ぎ。

その一方で、東日本大震災から学んだはずの様々な対策の必要性については、この国の中央政府はすっかり忘れてしまったようだ。

あれだけの犠牲者を出した大災害なのに、なぜ学んだことを活かさないのか不思議でならない。

そのせいか、能登半島はいまだに復旧さえできずに見捨てられているとしか思えない地域がある。

東日本大震災以降に発生した大地震

「南海トラフ地震」が騒がれてから、他地域で発生した震度六強以上の大地震は、東日本大震災を筆頭に、数限りなくあった。

二〇一六年の熊本地震、二〇一九年の山形沖地震、二〇二三年の能登半島地震、そして昨年正月の能登半島地震と続く。

震度6弱を含めると数えきれないほどの大地震が発生している。

今後三十年以内に起きるかもしれない大地震の可能性に大騒ぎしている最中にも、すでに「ノーマーク」の大地震が多数発生しているという矛盾に気がつかないのであろうか？

【取り残された能登半島】・・・プレジデントオンラインより

地震予知はできない！

東京大学大学院理学系研究科のロバート・ゲラー客員共同研究員の「日本は地震予知ができないことを認めるべきだ」とする投稿が英科学誌ネイチャーに二〇一七に掲載された。

続けてゲラー氏は「政府は地震の発生確率が分からないことを認めるべき」としている。

政府は、地震が周期的に起きるという仮説（周期説）に基づき、大きな地震に見舞われる確率などを算出しているが、ゲラー氏は投稿で「周期説は国際的な科学コミュニティーで否定された」と指摘までしている。

さらに東海地震を想定した大規模地震対策特別措置法（大震法）については「廃止すべきだ」と主張した。

国も東日本大震災を受け「予知はできない」との方針に大転換したはずだったが、再び方針を転換して逆戻りしたかのようだ。

「日本は地震予知ができないことを認めるべきだ」とする
ロバート・ゲラー客員共同研究員・・・日刊工業新聞より

高すぎる防潮堤問題

東日本大震災からの復興工事で引き合いに出される「高すぎる防潮堤問題」であるが、どう考えても被災地住民のために必要なものとは思えない。

海がまったく見えなくなるほど高い防潮堤とは、すなわち、津波の襲来も見えない防潮堤ということになるのだが、その矛盾に気づかないふりをしているのだろうか？

それとも、大手ゼネコンの大規模工事を優先したためであろうか？

大きな負の遺産として、この先も迷惑な建造物に悩まされていく可能性は高いと言わざるをえない。

「大規模災害に立ち向かう」から「早く避難する」に転換すべし

東日本大震災から国民が学んだ最も大事なことは、人間はどんなに科学が進んでも大自然には勝てないということだと筆者は思っているが、この点についても政府はどんどん後退してきていると感じる。

自然はほんとうに人間の力で克服できるのか？

この新聞でもたびたび触れてきたが、この国で気象観測が開始されて約百五十年経ったが、この期間は比較的、自然災害の規模が小さかったようだ。

【巨大な防潮堤】・・・ロイターより

筆者が言いたいのは、そのデータに基づいた発想では、災害対策を誤る可能性があるということだ。

いまから三百年ほど遡れば、富士山の大規模噴火もあったし、その他にも自然災害は目白押し状態ではなかったか？

こうしたことを勘案すると、自然を克服しようなどと不遜なことを考えるのではなく、自然を畏敬し、何が起きても不思議ではないとして、万が一起きた際の対応を検討する時間を増やし、起きた場合もいち早く安全な場所に避難する。

災害は大地震や大津波だけではない。山火事もあり、台風等の水害もある。

この国が大災害の頻発する国であるというのを国の基本的自然災害指針となるように祈るばかりである。

被災地の人口減少対策は急務

この記事の最後に、被災地の止まらない人口減少問題を取り上げたい。

東日本大震災から十四年間、一貫して被災地の人口減少が止まらない。

集落を維持できない規模になれば、人口ゼロ地域多発が目前なのだ。

いますぐ何とかしなければならないのである。

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

【東北】を冠した女子アイドルグループの人気にあやかろう！
【いぎなり東北産】と【けっぱって東北】のふたつのグループ

最近、グループ名に「東北」がついた女子アイドルグループが活躍中

芸能関係ニュースには疎い筆者ではあるが、最近、グループ名に「東北」を冠した女子アイドルグループが話題になっているようだ。

気になったので少し調べたところ、グループは一つだけでなく、いまのところ二つ存在するようであり、しかも結構な人気のようなので、ご存じない方もおられると思うので、今回号で取り上げることにした。

【いぎなり東北産（いぎなりとうほくさん）】

まずは、【いぎなり東北産】である。まことに風変わりなネーミングだが、よくよく考えてみると、東北らしさにあふれている。

【いぎなり東北産】勢ぞろい
・・・オフィシャルサイトより

「いぎなり」とは「急に」とか「とても」という言葉の東北のなまり言葉で、グループネーミングとしてはかなりユニークで、東北色を明確に打ち出している。

当然ながら、すべて東北出身者九名で構成され、東北関係のイベントはもちろん、全国でも活動しているし、地元の東北企業のCM出演の他、企業コラボレーションを多数行っている。

コラボ事業の実例

検索してみたら、仙台市をホームとする楽天球団とのコラボもあるようだし、筆者がよく知っている缶詰企業の「木の屋石巻水産」との缶詰コラボ事業もあるようだ。

その他にも、数えきれないほどの企業コラボがある。

東京所属が少々残念

出来たばかりのグループかと思いきや、今から十年前の二〇一五年に結成されたということなので、けっして出来立てホヤホヤのグループではない。

しかし、東京の芸能事務所の所属ということで、東北で誕生したグループではないのが多少残念である。

【けっぱって東北】

もう一つは【けっぱって東北】であり、こちらは二〇二二年結成で新しいグループである。

ライブやSNSを通して東北を！日本を！元気にすべく活動中というのが、グループのキャッチコピーであり、東北を応援してくれているのだと思うと、こちらも応援したくなる。

【いぎなり東北産】公演
・・・ビルボードジャパンより

「けっぱって」というからには青森中心のグループかと思いきや、青森出身のメンバーは最近「卒業」したようで、現在は、福島・宮城・山形・秋田・岩手出身の東北出身メンバー五名で、奥羽山脈のてっぺんを目指して活動中とのことである。

残念ながら、こちらのグループも東北内産出ではなく、東京の芸能事務所に所属し、関東を拠点として活動している。

「女子アイドルグループ」の地方版

なぜ「東北」なのか、東北だけ特別なのかと思ったが、実のところはこうした流れは、他にもあったのだ。

先鞭をつけたと思われるのはかつて大ヒットした女子アイドルグループの九州地方版が最初であり、そのヒットに刺激を受けての「東北」であり、さらには北海道にもそうしたグループが結成されたようだ。

東京中心の活動、顧客から地方の活動拠点、顧客発掘という大きな流れのなかでの「東北を冠したグループ」の誕生であるようだ。

とにかく活用しよう

そうした事情はともかく、こうした「東北」を冠した女子アイドルグループを企画するなどは、筆者のような高齢者にはなかなか思い浮かばない発想で、思いもよらないところからの東北応援を引き出す仕掛けであり、非常に面白いと思う。

そして、せっかくのブームなので、もっと盛り上げたらよいし、これに乗っかって、東北企業の活性化や、東北そのものの活性化にもつなげてほしいし、何より東北を元気にして欲しい！

【いぎなり東北産】楽天コラボ
・・・楽天 WEB より

【けっぱって東北】勢ぞろい
・・・オフィシャルサイトより

【いぎなり東北産】缶詰コラボ
・・・木の屋石巻水産より

【けっぱって東北】東北公演
・・・エンタックスより

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

あの日から一四回目の三月一一日

毎年開催される「仙台防災未来フォーラム」

今年もまた震災の日がやってくる。一四回目の三月一一日である。

今年も三月八日に開催された「仙台防災未来フォーラム」に参加した。震災以降、毎年欠かさずこの時期に開催されているイベントである。今年もたくさんの人が足を運んでいた。

今年も多数の発表、ワークショップ、ブース展示が行われていて、ブース展示は、自治体、学校、地域、企業、NPO法人など八〇を超える団体が出展していて見応えがあった。一過性のイベントではなく、このように毎年継続しているのが素晴らしいと思う。防災について考えるいい機会になっている。

今年は二年に一度の「世界防災フォーラム」も同じ仙台国際センターで開催されていて、そちらの方では国内だけでなく世界各国から防災の関係者や研究者などが集まって様々なセッションが行われていた。一四年前の震災で大きなダメージを受けた仙台で、このように国内外から関係者が集まって防災について情報発信、情報交換ができる場があるというのは、震災の経験を無駄にせず、この先につなげていくためにも大いに意味のあることである。

今年も荒浜へ

毎日自転車で通勤していると、非力な人力で進んでいるだけに、季節ごとの風の違いがよく分かる。冬の間は北西からの強い風に抗いながら必死でペダルを漕いでいるが、今日は南東からの風、まだちょっと冷たいが、これは春の風である。

一四年前のあの日は、北からの強い風が吹いてて、挙げ句地震の後には雪まで降ってきて、とても寒い日だった。あれから一四年経っても、この日だけは何か居ても立っても居られないような心持ちになる。だから、今年も午後休みを取って、一路、弟の最期の地、若林区荒浜へ。

一四年経っても、私はこうして毎年荒浜に行くし、私の家族は誰一人いまだにあの津波の映像は見られないし、そう考えると震災は終わってないなって気がするし、終わることなどないんだろうなとも思う。

ちなみに、私が荒浜に来るのは一年のうちでほぼこの日だけで、あとはここに来ることはほとんどない。普段は何となく足を向けたくない思いが今もある。

荒浜に行く途中に、弟が勤めていた若林区役所へ。弟はあの日、ここから荒浜に津波避難の呼び掛けに出掛けていって、帰らぬ人となった。区役所の一階には今年も献花場が設けられていて、まずはそこで花を供えた。

それとは別に、四階に上がると、あの日命を落とした弟たち職員のための献花場が設けられている。そちらでも花を供えた。

その後は、あの日弟が通ったであろう道を走って荒浜へ。震災後、災害危険区域に指定され、人が住めなくなった荒浜だが、「フルーツパークあらはま」は観光客が足を運ぶスポットになり、外でバーベキューができるカフェもできた。人が住めない地域に、どうやって人が集う場を創るかという取り組みが続いている。この日のお昼は、そのカフェ「ガーデンキッチン海と風」で、「牛タン・牛すじ合盛カレー」を美味しくいただいた。

海辺の荒浜慈聖観音にお焼香に行ったら、「あの日市役所の車が…」って話が聞こえてきて、思わず「そのお話、詳しく聞かせてください！」って言ってしまった。話の主はこの地区の町内会長だった方で、あの日避難を呼び掛けに自転車で回っていて、その時に弟とも会って話をしたそうである。たぶん、弟が一番最後に会った人だろう。そのような人にここで会えたのも何かのご縁かもしれない。

海岸には今年もたくさんの人がいた。ここにこの時刻にいる人たちはきっと、同じようにそれぞれ大切な誰かを亡くした人たちなんだろうなと思う。今日の海は遠くで波しぶきを上げているだけで、とても一四年前に一〇メートルもの高さでこの場所に押し寄せたとは信じられない。

地震発生の午後二時四六分、他の皆さんと一緒に海に向かって手を合わせた。

見渡す限り平野が続くこの地で、唯一ここにいた人たちが避難できた場所が、震災遺構となった荒浜小学校で、今も二階部分に津波の後が残っている。次に同じような津波が来た時の備えに、近くに「避難の丘」も整備された。午後三時一五分、今年も「HOPE FOR PROJECT」の取り組みで、荒浜小学校でみんなでそれぞれの思いを込めて風船リリースをした。

この地に大津波が押し寄せたのは午後三時五四分。弟はそれまでは生きてたので、私にとってこの時刻が重要な時刻である。その時刻に合わせて今年も、弟の遺体が見つかった南長沼に行って手を合わせた。何となく去りがたく、しばらくその場に佇んでいた。

来た道を戻り、再び若林区役所へ。あの日、弟が辿ってこれなかった道である。

区役所の建物の南側に、職員・友人有志の方々が造ってくれた「不忘（わすれじ）の碑」がある。たくさんの花が供えてあった。

今日ばかりは何があっても街に飲みに出ることも誰かと会うこともなく、寄り道せずにまっすぐ家に帰る。一四年前のあの日、家に帰ることができなかった弟を想いつつ。

ただ、毎年ケーキ屋さんには寄る。今日この日、生きているお祝いである。今年は「シベールの森」でケーキを買った。プレートには今年は、「今日も生きてる！」って書いてもらった。息子には、「それ書いてもらう時、何て言って頼むの？」って聞かれたが。

そして、今年もお気に入りのビールと、昔子どもの頃、弟と一緒によく食べてたやきとりの缶詰を。今日もこうして好きなものを飲み食いできるってことは、実は奇跡的なことなのだろう。

津波は「逃げれば助かる」災害

震災前、三陸沿岸と違って仙台平野には津波は来ない、と思われていた。私もそう聞かされていた。ちょっと歴史を紐解けば、そんなことは決してないことがすぐ分かるのだが。日本中の海岸沿いで津波が来ない場所などない。

弟は、「津波が来ないだろう」と思って逃げ遅れたのではない。なにせ、信号待ちがじれったくて交差点の前の方で信号が青になるのを今か今かと待ってる私と違って、「車が突っ込んでくるかもしれない」と思っていつも道路から離れたところで信号待ちをしているような慎重な性格だった。

海岸でお会いした元町内会長さんのお話では、あの日避難を呼び掛けても、なかなか避難しようとしない人がいたそうである。きっと、津波なんて来ないって思っていたのであろう。無理もない。仙台平野には津波は来ないと皆が思っていたのだから。弟はそうした人たちに最期まで一生懸命避難を呼び掛けていて、津波に巻き込まれたのだと思う。

津波が来ないかもしれない、ではなく、来ても大丈夫なように逃げてほしい。誰かが逃げないことで、逃げられない誰かがいるかもしれない、ということに、思いを馳せてほしい。逃げたのに津波が来なかった、それは「本番」に向けての練習になって「ラッキーだった」と思ってほしい。災害時に起こりがちな、心の平衡を保つための「大丈夫だろう」という「正常性バイアス」に囚われずに、常に最悪の事態を考えて身の安全を守ってほしい。

仙台では最近、津波警報が出された時に沿岸部に自動運転のドローンを飛ばして空から避難を呼び掛けるシステムを作った。画期的だが、でも、このドローン、雨風の強い時には飛べない。そのような時に地震が来たら、結局どうしても人の手に頼らざるを得ない部分は残る。

津波は、「逃げれば助かる」災害である。躊躇なく逃げてほしい。そして、いざという時にどう逃げるか、普段からしっかり考えていてほしい。

あれから一四年、その年に生まれた人も一四歳、どんどん震災のことを知らない人が増えてきている。あの震災を生き残った者として、これからもしっかり震災のことを伝え続けていかないと、と思っている。

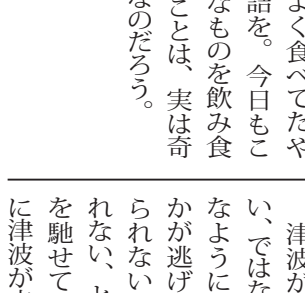
弟の「置き土産」

私の息子は、当時三歳で、震災のことはまったく覚えていないそうである。でも、その一ヶ月くらい前に両親と弟のいる実家に一人でお泊りに行って、その時に弟が遊んでくれたことは克明に覚えている。こたつ（の天板）を傾けて坂にして、そこで二人でミニカーを走らせていっぱい遊んで、それがとても楽しかった、とのこと。

私が弟に最後に会ったのはその年のお正月のことだったので、一緒に住んでた両親を除くと、一番最後に弟に会ったのは、この息子ということになる。あの大変だった震災のことは何一つ覚えていないのに、弟に遊んでもらったことはしっかり覚えている、私はこれは、弟のステキな「置き土産」だったと思っている。

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

アイヌ語地名、再び―「蝦夷どもが夢の谷」への旅の事

昨年の暮れの事、私は近年個人的に恒例となった、「年末の山形行き」の為に仙山線に乗り、雪に包まれた奥羽山脈を横断した。この山形行きというのは正月の庄内への帰省ではなく、山を越えてすぐの山形市や天童市の蕎麦店で年越し蕎麦を戴く、という「独り行事」である―と言うのも、数年前に郷の老父が死去してからはその顔を見に、また共に年を越す為にこの時期に敢えて帰省するという事がなくなり、加えて実家に住む姉も勤めている地元の旅館が年末年始に多忙過ぎて家にいないという事でならば時期をずらして十一月や二月にあらためて帰省するか、という事になったのだった。それでもわざわざ年越し蕎麦を山形で？と思うが、実のところ仙台・宮城にも美味なる蕎麦は多数存在するも、山形県人でありまた山を越えるだけでその地に到達できるならば年越しぐらいは蕎麦の聖地たる我が山形で、となるのも無理からぬところではあろう―そのような流れで本稿は山形の話だが、今回の主役は蕎麦ではなく、食後のもう一つの山形での大きな楽しみ―それは、本である。何の事はない、市内の図書館や書店での本漁りなのだが、やはり日頃通っている街の本棚にはない逸品を発見できる可能性がありその成果は侮れないのだ。

奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

地元誇る八文字屋書店は郷・鶴岡市にも、更には仙台市にも支店があり何れも優良店ではあるが、殊山形本店に至っては書籍・文具含めて他では見かけない個性的な品揃えが輝きを放っており、盛岡のさわや書店にも負けてはいない。此度のここでの大きな収穫として、とある地元出版物を取り上げてみたい―それが、米沢市出身・在住の作家にして郷土史研究家・清野春樹氏による『山形県のアイヌ語地名』である。

※

清野氏は昭和二十四年生まれ、県内の高校教諭を勤めながら県内外の名所旧跡を渡り歩き、地域に伝わる物語や地名の由来などの調査を続け、地元出版で数々の歴史考察を手掛ける他、長編小説で歴史浪漫文学賞大賞に輝いた経歴も持つ。

県内のアイヌ語地名関連作品は、本書の他にも『山形県のアイヌ文化』があり本書の序文やあとがきには著者自らが当初アイヌに対する誤解や蔑視があった事への反省の気持ちや、山形県の自然環境を正しく、豊かに捉える為にアイヌ語地名を理解する事の重要さ、特に世の知的と言われる人々ほどアイヌ語地名を信じようとしないとして、如何にアイヌ語地名がその土地への深い理解の上に残されているかを知り、その存在を認め、好きになってほしいとの願いが綴られ、まさに氏にとって山形県のアイヌ語地名はライフワークなのだと感じ入るのである。

東北、特に東北南部におけるアイヌ語地名残存の是非については本誌一〇六号の拙稿で論じた通りだ。その際、私は山形県以南にはアイヌ語地名はほとんど確認できない、とする筒井功氏の結論に反発し「都岐沙羅柵」のように明らかに何らかの理由で「消された」アイヌ語地名が山形県には数多く存在するに違いないと主張したが、本書は私のその持論を補強、後押ししてくれたのみならず、思いもかけぬその先の展開までも示してくれたのである。

実は昔、私は郷土・山形県庄内の地で「蝦夷の住居跡」を探した事がある。

あまりに昔の事で記憶は曖昧だが、恐らくは以前の拙稿で触れた岩手県二戸地方に所謂雑穀である「稗」を探す旅をした頃とそうかけ離れた時期ではない―当時東京に住みながら、幾つかのきっかけから東北という「置いてきた故地」に意識が向き始めるも、どのようにアプローチしていけば良いか皆目わからず、ともかくも縁や目的に最も近い現地へ踏み入れる他なし、という状況だったと回想する。当時、始めの足掛かりとして訪れたのはもはや書くまでもなく岩手県遠野市で、私はここから東北の新しいイメージを構築していったと言えるのだが、同時に紛れもなく同様に東北の一地域である郷土・庄内に関しても常に無視できない心情ではあった。しかし当初庄内は云わば私にとって回帰すべき新天地としての東北―岩手あるいは宮城に対して、依然として愛憎半ばならぬ憎さ百倍で捨て置いてきたとさえ言える旧天地としての東北であり、つまりは私という一東北人の内面において東北は二つに分割されていたのである。

そうは言っても、私は帰省の度に探し回っていた。岩手にあるような中央権力に抗った地元勢力「蝦夷」の痕跡を―そして、それは僅かながら認められた。

羽黒山近くの「蝦夷館公園」別名・薬師沢館は八重桜の名所で、蝦夷というよりは縄文時代の住居跡で多数の古代遺物が出土する事から名付けられたらしく、中世には城郭があったと言われながら詳細は不明だが市からの委託という形で地域住民が管理し、優れた環境が維持されている珍しい公園であるとの事である。

もう一つは、かつての城下町・鶴岡の奥座敷と呼ばれた湯田川温泉である。湯田川といえば、海岸側の温海温泉そして私の郷である湯野浜温泉と合わせて庄内三名湯と呼ばれる温泉地で十一世紀開湯の湯野浜を除き、温海・湯田川共に縄文以来の歴史を持つ古湯である。特に山野に囲まれた湯田川は周辺に「湯田川チャシ楯跡群」―チャシ、つまりアイヌ語で砦、先住民の軍事施設跡という事―がある、というので、私は帰省中のある日に出掛けてみたのである。湯田川をロケ地とした藤沢周平原作の映画『たそがれ清兵衛』公開は二〇〇二年で、これを観た後だった気がするがオートバイではなく少ない本数のバスで行き、現地をひたすら歩き回ったような気がする。当遺跡群については当時情報が少なく、どこにあるのかも遂にわからぬまま到達する事は叶わなかったのである。以来、久しく湯田川を意識する事はなく、戊辰戦争時に江戸警護役を解かれた「新徴組」が当地の旅館に本部を置いた事を後に知ったぐらいであったが、この程件の本書を手に取って、大いに驚かされる事となる。

以前私は拙稿の中で古代日本海側の対・蝦夷用軍事施設である「都岐沙羅柵」は現・庄内にあり、その後その名を始めとする当地のアイヌ語地名は伝承にも残らぬ程に掻き消された、との仮説を述べた。つまり渟足柵、磐舟柵と現地名が推測できる新潟県域とも、明らかなアイヌ語地名が多く残る秋田県域とも異なる征服後の政策が、何らかの理由でこの山形含む南奥地域にのみ施された可能性がある、という事だ。

本書でも、都岐沙羅柵を現庄内・大山地域として、羽根田・渡會など渡来人由来の姓が多い事（確かに私の同級生にいた）で主張を裏付けている。北東北三県に比べ「ナイ・ベツ」地名が少ない理由についても、律令勢力の進出が早かった事、侵略政策が異なっていた事を上げながら、一方で判別困難になってはいるが未だ多くのアイヌ語で解釈可能な地名が存在する事を説いている。例えば、米沢は岩手県の地名・人名に多い米内（獣・蛇の多い沢）と同じ意味で、山形地域ではこれに和語である「沢」を追加し、同じ意味を重複させてしまう（「フラダンス」のようなものか）中で「ナイ」の音が隠れてしまっている、とする。このように、和語の追加・合体による地名の大和化など侵略初期に為されていた努力？によって、ナイ・ベツが隠れてしまっている事が、山形県のアイヌ語地名の特徴である、というのだ。

他、僅かながら例を羅列してみると、村山地方だけでも「恥川」「鮨洗」「去天呂」、置賜地方も「初神」や秋田・岩手にも同名神が存在する「保呂羽大権現」など明らかにアイヌ語起源の地名の多い一方で、庄内の「櫛引」や「雪車田」といった地名に関しては「これはアイヌ語ではない」とする冷徹な分析と判断も忘れていない。

だが驚かされるのはここからで、私も拙稿で言及した「越の蝦夷」伊高岐那という人物―彼が俘囚の民七十戸を率いて一郡の建国を願い出て許可されたという『日本書紀』記載の有名な件の、その「一郡」こそが現・湯田川そのものではないか―と説くのである。

湯田川の由豆佐売神社は『延喜式神名帳』にも記載された式内社であり、古代出羽国砂浜に石鏃が降る怪事件があって、原因が当社への崇敬を怠った為であるとされるなど恐れられた神でもあるが、ユズサメとは「湯と湧き水の豊かな谷」を意味する事から、元は湯田川地域全体を指した名前であり、そして伊高岐那の名前もまた「畏怖すべき草多き谷」を意味し、湯田川の地理と一致しているとして、ここにもアイヌ語地名が「神に守られた恩寵の世界」を表現するものである事が強調されているのである。

この地には二つの政治的中心が存在した―つまり、征服・移住者側である人々による都岐沙羅、そして現地の蝦夷たちの湯田川である。この二者・二地点の対比が明確になった事で、私の中の古代庄内地図がより可視化され、一気にこの地域の魅力が倍増したと感じられた。真に、驚嘆すべき清野氏の推理力、イメージ力と言わねばなるまい。

※

湯田川という土地の周辺は県下でも珍しいほどに多くの縄文期遺物やチャシ跡が発見されるという。その問題のチャシ楯跡群であるが、現在のネット上でもほとんど詳細は不明ながら、どうやら湯田川を囲む六つの山頂（石童山・鎮台・大日坂・深沢・かき山・高野山）にあるらしいという事がわかった・・どうりで、山頂ではあの頃辿り着けなかった訳である。

六つの山頂に建つ砦に守られた谷―つまり湯田川は先住者・蝦夷たちにとって殊のほか大切な場所であった、という事か。南からの侵略を受け、従属しながらも、元々の自らのものだったはずの土地、その僅かな領有の「許可」を得て、小さくとも新たな国を立てんとした伊高岐那―その地を囲む六つの「山城」は何を意味していたのだろうか？

今は鄙びた山間の温泉街かつては蝦夷ら、武士たちが隠れ住み、新たな国の展望を論じ合い、夢を語り合った最後のアジール・・再びその地を訪れる時、我が鼻はそこに「奥座敷」どころではない、思いがけぬ熱き夢の残り香と、我が眼は撒かれた革新の種の芽吹きを認めるかも知れない。

『山形県のアイヌ語地名』
不忘出版　2023 年

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

黒森神楽遠野巡行

黒森神楽遠野巡行

角

白骨

シリーズ　遠野の自然

「遠野の啓蟄」

遠野 1000 景より

暦上は「啓蟄」ではあるが、遠野はまだまだ寒さが居座っているようで、氷点下十度の日もあるようだ。

とはいえ、筆者の暮らす関東エリアではときどき雪の舞う日があっても、確実に春が近づいているのを感じる。

これまでは寒さで委縮していた身体が少しずつ伸びていくような感覚もある。

春の気配を感じるときは心が穏やかになるが、他方、この国も、世界も、嫌なことだらけで気が滅入る。

何とかならないものかと思うが、どうしようもないようだ。

なるべく早く、この国にも、世界にも、みなが楽しめる春が到来することを望む。

冬の渓流

フクジュソウ開花

カモのシンクロ

昔～す、あったづもな　今はねど　どんどはれ。

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

新シリーズ【東北を再発見する旅】…⑰　「アラハバキ神社」その①

いまは数少ないアラハバキ神社、そのひとつが多賀城市にある

ナゾのアラハバキ信仰

アラハバキ信仰という古代日本にあった宗教を知っている人は少ない。

ましてや、その宗教に興味を持ち、調べているという人はもっと少なく、かなりの「アラハバキオタク」かもしれない。

とにかく、この宗教に興味を持つと大変な迷路に迷い込んで抜け出せなくなることは確実だ。

とにかくナゾだらけの信仰であり、その正体は容易に姿を現さない。

古代日本では国中に広まっていた信仰のようだが、表舞台から消されたためなのだろうか、その由来も、どんな宗教なのかもよく分からないのである。

アラハバキ神社を宮城県多賀城市に訪ねる

筆者が訪ねたことがあるアラハバキ神社は二つあるが、今回はそのうちのひとつを紹介しよう。

宮城県多賀城市にあるが、正確で詳しい地図もなく、近隣をさまよい歩くうちに何とかたどり着いたような小さな神社であった。

しかも私有地のなかにあり、民家に隣接するという変わった神社だった。

ちょうど御在宅の住人に玄関からひと声をかけて参拝させてもらった。

たくさんのハサミや靴が供えられていた

多賀城市教育委員会によるアラハバキ神社の説明の立て札によれば、荒脛巾（あらはばき）神社は、足の神様として知られており、旅の安全を祈願する人々によって厚く信仰されたとの記載であった。そのためか、たくさんの靴が、奉納というのか、供えられていた。

他方、たくさんのハサミも供えられていたが、前記の教育委員会の説明では、病の根を断ち切るということからハサミも奉納されているというが、旅の安全とハサミにはどんな関係があるかはよく分からない。

ここでもすぐにナゾの渦に引き込まれる。

もっと別の由来と宗教が秘されていると直感する。

こうしたナゾが誘い水となって、どんどんはまっていく宗教なのだ。

アラハバキ信仰はかなり古い宗教

同じく、説明板には十八世紀に建てられた神社との説明があったが、もともとはわずか二百年ほどの新しい神社でもなければ、宗教でもないことはすぐにも推測できる。

筆者の推測では、少なくとも、奈良時代に東北が大和朝廷から侵略を受けた時代にはこの地域一帯で、広く信仰されていた宗教であると考えている。

偽書（？）の『東日流外三郡誌』の影響

アラハバキ信仰が一躍「有名」になるのに多大な貢献があったのが千九百七十年代に突如登場した『東日流外三郡誌』（つがるそとさんぐんし）という書物であり、真贋論争でさらに「有名」になった。

古代の津軽地方（東日流）にはヤマト王権から弾圧された民族の文明が栄えていたと主張するとともに、アラハバキを「荒羽吐」または「荒覇吐」と書き、遮光器土偶の絵を載せ、アラハバキのビジュアルイメージは遮光器土偶である、という印象を広めたのも、本書が「震源」である。

その後、アラハバキが「縄文の神」説、「蝦夷の神」説が広まっていったようだ。この流れに乗ったかつての「アラハバキファン」はいまもいることだろう。

偽書の疑いがある書物だが、「東北」としてはどこかくすぐったい気持ちが湧く。

真実のアラハバキ信仰はどこに？

こうしてナゾだらけのアラハバキ信仰であるが、非常に魅力的でもある。

文献も消されて、神社も希少となって、伝承も途絶え、あらゆる痕跡が消されたこの古代宗教は、このさきも人々を惹きつけて止むことはないだろう。

アラハバキ神社鳥居

アラハバキ神社由来

拝殿

遠景

ハサミが供えられている

靴もたくさん供えられていた

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真でお伝えする

東北の風景

「えんぶり」

写真撮影　尾崎匠

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.